第1場

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

美咲　私は今、暗い気持ちでいる。理由は、仕事とはいえ、また、人の記憶を触らなければいけないからだ。…２０２５年１１月２８日。朝から大雨。上司からラインが来る。どうやら、私が担当する患者が久しぶりに決まったようだ。４か月ぶりの患者。私はミーティングルームへ向かう。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

美咲　足を止めて、廊下の窓から外を見る。波が勢いよく岸壁に打ち付けている。その様子は、まるで私の心の葛藤を表してい

るかのようだ。私は一つ、ため息をつく。そして、気を入れ直して、ミーティングルームに再び向かう。仕事だからやるしかない。そう、自分に言い聞かせながら。…この場所は、東京から約１０００キロ南の島にあります。竹島桟橋からフェリーで２４時間。小笠原諸島の中の小さな島。その最南端に、この建物はひっそりと建っている。ここは、奇跡の場所と呼ばれていました。それもそのはず。この場所では、訪れた人間の記憶を部分的に消去できるのです。事故や殺人事件の目撃者、重度のＰＴＳＤ患者、何かの記憶が原因で、社会生活が送れなくなってしまった人の苦しみを、この場所で、記憶の操作をすることによって、苦しみを柔らげ、人間らしい生活を送っていけるよう、治療しているのです。ここは、国が運営する正式な医療機関。１人でも多くの人に、幸せな人生を歩んでもらうための場所。メディアに騒がれないよう、ネットで騒がれないよう、秘密裏に、絶対にここで何が行われているのか情報が流出しないように、厳重な情報統制を敷きながら運営されていた。記憶センター。私はここで、カウンセラー、そして記憶の執刀医として従事しています。この仕事に就いて3年目。まだそんなに多くの患者を任されたわけではない。でも、患者が決まった日は、いつも気が重い。

マリア　「美咲、おはよう。」

美咲　ミーティングルームに着くと、マリアが先に到着していた。そして、話しかけてきた。「おはよう。」私は返した。

マリア　「美咲にとって、久しぶりの患者だね。」

美咲　「うん。」

マリア　「浮かない顔してるね。」

美咲　「そう?」その通り。私は今、浮かない気分だ。

マリア　「美咲はいつもそう。患者が決まったら、浮かない顔になる。」

美咲　「そうかな?」私は笑いながら言った。マリアは私のことをよくわかっている。

マリア　「でも、気にすることないよ。美咲は、人の記憶を操作することに疑問を持っている。記憶の操作には様々な意見がある。

本当に正しいことをしているのか。本当に人の役に立っているのか。でも、一つ言えることは、患者は、自分の意思でこの場所を訪れている。私たちは、私たちの仕事をするだけだよ。」

美咲　「そうだね。」このタイミングで、そういった言葉をかけてくれるのは、本当にありがたい。「ありがとう。」私は、感謝の思いをこめて言った。マリアは微笑んだ。…そうだな。記憶の操作というものに対して、私の思いなんて関係ない。私は私の仕事をするだけ。だって、患者は自分で望んでここにきているんだから。そう考えると、少し気が楽になった。…上司から、今回の経緯や、今後の流れの説明を受け、一通り終わると、一息つく。時計を見ると、時刻は午前１０時５２分。間もなく、患者との面会の時刻。…ピリリリリと、病院から支給された携帯電話の呼び出し音が鳴った。どうやら、患者が到着したようだ。私は立ち上がり、ミーティングルームを出て、マリアと一緒に、カウンセリング室へ向かった。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

美咲　相変わらず、波は勢いよく岸壁に打ち付けている。…カウンセリング室に到着する。コンコンコン。ノックをしてドアを開ける。すると、私は目を疑った。座っていたのは、親友の七海だったのだ。大学時代、同じ学部に通っていて仲良くなり、社会人になって5年。休みの日など、未だによくつるんでる。なんで?なんで七海がいるの?…「なんで?」私は七海に近寄って聞いた。

七海　「うん。」

美咲　「いや、うんじゃなくて。…どうして、ここにいるの？」

七海　「実は、美咲がここに勤めてるって聞いて、来たんだ。」

美咲　「え？」…私がここに勤めていることは誰にも言っていない。厳重な情報統制のもと、どこにも情報が流出しないようになっているはず。どういうこと？…「どこから、聞いたの？」

七海　「うん。」

美咲　七海は口をつぐんだ。え？どこから情報が流れた？…「あと、どうしてここに来たの？」

七海　「ここに来た理由は、一つしかないでしょ？」

美咲　「もしかして…。」

七海　「私、消してほしい記憶があるの。どうしても忘れたい過去。」

美咲　「え？」

七海　「お願いします。私の記憶を消してください。」

美咲　七海は鋭い視線を私に向けて言った。その視線の鋭さから、ただ事ではない雰囲気を感じ取った。

第２場

美咲　七海は私のかけがえのない友人です。七海とはこれまで、お互いの夢について、いくつもの夜を語り明かしました。私たちはいつも意気投合。私は、七海と会った日は、いつも嬉しい気持ちになりました。七海は今、司法試験の合格を目指し

て取り組んでいます。自分の夢に向かって、まっすぐ進んでいる。また、七海はとても明るい人でした。くだらない冗談をすぐ口にするし、私がくだらない冗談を言ったら、いつも馬鹿笑いしてくれる。だから、まさかこの場所にきて、記憶を消してほしいって言ってくるなんて、思いもよらなかった。…私は席に着いて、ヒアリングシートを机の上に広げ、カウンセリングをスタートさせる。開始から１０分、七海は沈黙を破って、重い口を開いた。

七海　「私ね、母を恨んでるんだ。」

美咲　「母を、恨んでる？」

七海　「うん。」

美咲　「そう、なんだ。」

七海　「美咲に言ってなかったかもしれないけど、家庭の事情って言うか、色々あって。」

美咲　「そう。…何があったの？」

七海　「…。」

美咲　「言えることから、ちょっとずつでいいから、聞かせてくれるかな。」

七海　「私、実は、中学３年生の時から、児童養護施設で過ごしたんだよね。」

美咲　「そうだったんだ。」

七海　「大学には、国の支援金制度を利用しながら、アルバイトして、授業料払って通ってたの。」

美咲　「全然知らなかった。」

七海　「今も、アルバイトして、司法試験の勉強してる。」

美咲　「そうだよね。…なんで、児童養護施設に入ったの？」

七海　「私、母に捨てられたんだ。」

美咲　「捨てられた。」

七海　「中３の時に、出て行ったの。男の車に乗り込む後ろ姿を見たのが最後。それで児童養護施設に。」

美咲　「ごめん。私、知らなかった。」

七海　「ううーん。こっちが言ってないんだから、しょうがないじゃん。」

美咲　「…それで、恨んでるの？」

七海　「うん。…１０代のころは、何とも思わなかったんだ。そうなんだ、って感じ。母にもいろいろあったんだろうなって思って。自分が生きていくのにで精一杯だったし。」

美咲　私はうなづきながら、七海の言葉を聞く。

七海　「でも、大学出て、社会人になってから。特に、実現したい夢に向かって、歩き始めてから。なんて言うかな。寂しくなることが多くなったっていうか。」

美咲　私は七海の言葉を聞く。

七海　「私は母に捨てられた。帰る場所がない。そう思うと、急に弱気になってしまうって言うか。涙が出てくることもあって。」

美咲　私は七海の言葉を聞く。

七海　「私、司法試験に今年も落ちたんだ。これで３回目。」

美咲　「…。」

七海　「母に捨てられた、帰る場所がない、という事実が、私を弱くしている。何回考えても、その結論になる。」

美咲　「…。」

七海　「あの人の記憶がなくなれば、前に進めると思うんだ。背負わされた重い十字架を下すことができる。…こんな場所があ

るなら、親友の美咲が勤めてるなら、助けてほしいって思ったの。」

美咲　「…。」

七海　「お願い、美咲。助けて。」

美咲　「…。」

七海　「私、前に進みたい。」

美咲　七海は、大声で泣き始めた。これまでの苦しかった思いが、痛いほど伝わってきた。

マリア　「七海さん。大丈夫ですよ。」

七海　「…。」

美咲　マリアが美咲を慰めてくれた。七海は少し落ち着いたけど、両手で目を覆って、しくしく泣いている。その様子を見ながら、これは、難しい案件になりそうだなと思った。…こんな仕事をしている人間が言うのもなんだけど、人間の記憶を操作することを、私は悪いことだととらえている。記憶は人間の一番の財産だ。物やお金じゃない。良い記憶も、悪い記憶も、これまで経験してきた出来事は、物やお金には代えられない、かけがえのないものなのだ。そしてまた、これまでの経験、過去があって、今の自分がある。記憶を操作するということは、過去を変え、その人自身を変えることと同義だ。そんなことを、人間の手でやっていいものなのか？私はいつもそのことを考えていました。向き合いたくない過去は誰もが持っている。後悔している過去は誰でもある。でも、それらの過去を変えるということは、もはやその人はその人ではなくなるのではないか？…母に捨てられた。帰る場所がない。でもそれで七海の記憶を消してしまったら、七海は七海でなくなるのではないか？「分かった。」私は七海の手を握って言った。「なるべく力になれるようにする。」七海は鋭い視線をこちら向けて聞いている。「でも、記憶の操作は、今後の人生にかかわる大きな決断。一度ゆっくり考えて決定しましょう。とりあえず今晩考えてください。ここから１０分ほど歩いたところに、宿泊施設があります。そこで１日過ご

してもらって、明日、またここでお会いしましょう。」私はそう言って、案内を一式渡した。

七海　「ありがとう。」

美咲　七海は、涙ぐみながら私に言った。七海は立ち上がり、カウンセリング室から出て行った。私は大きく、ため息をついた。七海にそんな過去があったなんて知らなかった。何かできることはなかったのか、自分の無力を少し悔やんだ。

マリア　「美咲。」

美咲　マリアが話しかけてきた。

マリア　「また、迷ってるでしょう。顔に書いてあるよ」

美咲　マリアは、いつも私のことをお見通しだ。

マリア　「でも、繰り返しだけど、患者は患者の意思でここに来てる。気にする必要はない」

美咲　「ありがとう。」マリアは一足先にカウンセリング室を出て行った。本当にありがたい。マリアはいつも私のプレッシャーを和らげてくれる。私も、席を立ち、カウンセリング室を出た。…マリアに心を和らげてもらったものの、廊下を歩きながら、いろんな思いが頭を駆け巡った。…母に捨てられた。帰る場所がない。…でも、事故や殺人事件の目撃者、重度のＰＴＳＤの患者と比較すると、消すほどの記憶なのだろうか？私は許可をしていいのだろうか。結論がまとまらなかった。

第３場

七海　物心ついた時、既に父はいませんでした。両親は、私が１歳の頃、離婚。母は私を、夜の仕事をしながら育ててくれまし

た。私は一人で過ごすことも多かったけど、母はそんな私をいつも気にかけてくれました。とてもやさしい母。そんな母を、私は心から愛していました。母の腕に抱かれた時、母と手をつないだ時、押し寄せる安心感。母がここにいる。ここに帰れば、私はすべての不安から解放される。ここは、私の帰る場所。だから、あの日起こったことは、本当に衝撃的だった。あの日、中3の夏、ごめんねという言葉を残して、帰ってこなかった。男の車に乗り込む母の後ろ姿は、今でも鮮明に覚えている、今何をしているのだろうか、生きているのだろうか。何にもわからない。また、なぜ、出て行ったのかもわからない。私は、美咲に何とも思わないと思っていたけど、溢れすぎる思いについていけず、心にふたをして、毎日を過ごしてきたのです。そうでないと、自分が壊れてしまう、そんな思いだったのです。…児童養護施設で暮らすことになってからは、自分の人生を変える決意をした。見返してやる。絶対に私は人生の成功者になってやる。また、夢を持ちました。私は法律家になる。そして私のような弱者を守る。そして一人でも多くの人に、私のような思いをさせない。私は強い思いで、アルバイトをしながら、司法試験の勉強を続けました。でも…突然、涙が出るのです。何もない、ふとした瞬間に、突然、心が制御できなくなって、周りに迷惑をかけてしまう。また、私の心を弱くしました。夢に向かっている時、勉強に励んでいる時、ふっと、私は愛されていない、そんな思いになって、他の人から劣っているような気になって、力が出なくなる。あの過去。あの記憶。私には帰る場所がない。その思いが、私の心をこんな風にした。私は、夢をかなえたい。自分の道を自分の手で切り開きたい。だから私は、あの過去をきれいさっぱり清算するのです。

美咲

私は七海とのカウンセリングを思い出していた。帰る場所がない。そんな事情を抱えていたなんて知らなかった。何かできたんじゃないか、気づいてあげることができたんじゃないか?できなかったことを、もう一度悔んだ。帰る場所がない。そのことを想像してみる。母子家庭。一人っ子。唯一の家族である母が、中3で蒸発。私も七海と同じように夢を持っている。やりたいこと、自分の夢、そんなに上手くいくわけじゃない。失敗を繰り返し、全然前に進まず、自分の甘さ、未熟さを思い知る。時には限界を感じることもある。生きていくつらさ、しんどさ、いろんな思いを抱えて、悶々としなが

ら、とぼとぼと道を歩く。すれ違う人の顔が笑顔なら、なぜかいら立ってしまう。そんな自分が嫌になる。…そんな時、家の扉を開け、自分を待ってくれる人がいる。見てくれている人がいる。たとえ暗い顔をしていても、何も聞かず、すべてを察してすべてを読み取るように、お帰りと言ってくれる家族がいる。帰る場所は人を強くする。帰る場所は人の原点だ。それがない。七海の思いを想像すればするほど、苦しい思いになった。

健太郎

七海と連絡が取れなくなったのは、一週間前のことでした。僕と七海は、毎日会っている。僕たちは大学からの腐れ縁。学部、ゼミ、ずっと一緒。僕たちは仲間。だから、突然ラインの既読がつかなくなる、なんてことは、よほどのことがない限りない。…僕たちは予備校に通っていました。予備校と言っても、大学受験ではなく、司法試験の予備校。僕と七海は、司法試験の合格をともに目指していました。僕たちは弁護士になって、社会で困っている人、社会的弱者を助けられるような、そんな弁護士になりたい、という夢を持っていました。僕たちは、２０２３年、２０２４年と受験するも、不合格。しかし、今年はなんと合格！夢への一歩を踏み出すことができた。でも、七海は今年も不合格だった。今年こそ、と息巻いて、去年、一昨年以上に勉強に励んでいたのを横で見ていたから、その落胆ぶりを見るのは、とてもつらかった。僕たちは腐れ縁。出会ってから約６年、ずっと同じ夢を描いて頑張ってきた。だからラインの既読がつかなくなったとき、もうあきらめてしまうのかな？と思って、とても苦しかった。…その時です！その時！…僕の知り合いと名乗るハンドルネームのアカウントから、突然僕のＳＮＳに、ダイレクトメールが来た。「健太郎さん、あなたの仲間の七海さんが、ここに向かっているようです」と書かれてありました。とても不思議なダイレクトメールでした。その場所は、竹芝桟橋から船で２４時間と書かれてありました。え？本当に？…本当に不思議なダイレクトメール。もう一度、その場所についての情報を見てみる。…記憶センター。…僕はすぐにスマホを取り、職場に適当な理由を告げて休暇を取り、そしてすぐに、船のチケットを予約した。

第４場

美咲　翌朝、目が覚めると、スマホを出して、予定を確認する。午前１１時。カウンセリング室。…変わりなし。どうやら、七海は決心を変えることはなかったようだ。支度をして、センターへ向かう。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

健太郎　ザバーン。

七海　ザバーン。

マリア　ザバーン。

美咲　今日も波は勢いよく岸壁に打ち付けている。到着すると、デスクに荷物を置いて、カウンセリング室へ向かう。午前１０時５７分。七海はきっと、もう来ているだろう。

七海　美咲が姿を現した。カウンセリングが始まった。。

美咲　「どう？」

七海　「…。」

美咲　七海はまた黙っている。私は言葉をかける。「何か心の変化はあった？」すると、七海は重い口を開いた。

七海　「色々考えたんだけど、やっぱり。」

美咲　「そう。」私はすべてを察した。そうだよね。ここに来るぐらいだから、心は決まってるよね。…「じゃあ、決行、とい

うことで、お間違いないですね？」

七海　「はい。」

美咲　「わかりました。」私は、フーと、息を吐き出した。また暗い気持ちになったが、これは仕事なんだと自分に言い聞かせ、七海に手術に関する説明をした。軽く意識を飛ばした状態で行うこと、痛みを伴わないこと、１２時間以内に完了すること、完了したら後戻りできないこと、一通り説明し、書類を出し、サインを促した。七海はサインした。そして、上からあまり使うなと言われているものを、念のために用意した。…「手術中、こちらのボタンを持ってください。万が一、心が変わったときは、これを押すだけで、手術を止めることができます。使わないかもしれないけど、何かあったときのために。」

七海　「わかりました。」

美咲　何かあってほしい。できれば思いとどまってほしい。患者に意思を、私たちはどうすることもできない。でも、できれば、いや、どうか思いとどまってくれますように。祈るような思いで、ボタンを渡した。「では。」私は立ち上がり、手術室へ向かおうとした。…その時、建物の外がなんだか騒がしくなっているような気がして、窓から外を見た。すると、一人の男性が大きな声を出して、警備員ともめている姿が目に入った。

マリア　「どうしたんだろう。」

美咲　「さあ。」

マリア　「ちょっと見てくる。」

美咲　マリアは部屋を出て行った。

七海　「何かあったの？」

美咲　「何だろ。」七海も外を見る。

七海　「あれ？」

美咲　「どうしたの？」

七海　「私の知り合い。」

美咲　「え？」

七海　「何で、ここにいるの？」

美咲　七海はそう言うと、少し慌てるそぶりを見せた。…知り合いってどういうこと？…もう少し外を見ていると、その男性の元へマリアが駆け寄り何か話をしている。３０秒ほど話をした後、マリアはその男性を建物の中に入れた。え？大丈夫なの？…すると、この部屋のドアがが開いた。

健太郎　「七海！」

七海　「健太郎！…どうしてここにいるの？どうして？」

健太郎　「七海が心配だからに決まってるだろ。」

七海　「どうして、私がここにいることを知ってるの？」

健太郎　「それはいいだろ。そんなことより！…何をしようとしてるの？」

七海　「…。」

健太郎　「ここで何しようとしてるの！」

七海　「…。」

健太郎　「調べたよ。この場所のこと。」

七海　「…。」

健太郎　「何でこんなところにいるんだよ。まさか、何かの記憶を消そうと思ってるの？」

マリア　「ちょっと落ち着きましょう。落ち着いて。一度落ち着いて、お話ししましょう。ね？」

健太郎　「落ち着きましょうったって、こんな状況で落ち着けるわけしょう！」

マリア　「別の部屋でお話ししましょう！ね？七海さんも。」

美咲　突然の出来事にあっけにとられてしまったけど、私たちはとりあえず、彼の話を聞くことにした。